

<書評>

部落解放・人権研究所 編

『部落解放研究』第205号 特集：識字・基礎教育保障の動向と課題  
解放出版社 2016年10月

長岡智寿子（日本女子大学学術研究員）

本誌は、大阪を拠点に活動する部落解放・人権研究所の識字・成人基礎教育研究会が取組んだ「大阪府内識字学級実態調査」報告をはじめ、昨今の識字活動、成人教育の動向をまとめた研究誌である。

本号が「識字・基礎教育保障の動向と課題」をテーマとした背景には、「教育機会確保法」の成立（2016年12月）に向けた動きの活発化に加え、日本社会において、基礎教育を必要としている人々が多数にのぼるとの事実が次第に明らかになってきたことがあげられる。大阪を中心に教育支援活動に携わる13名の実践家や研究者による、多彩な視点からの課題提起は意義深い。

冒頭、特集設定に関するイントロダクションの後、本号全体に通ずる概念であるリテラシーと識字について、丁寧に整理されている。

次に、同研究所が2015年度から取り組んでいる大阪の被差別部落の識字教室に関する調査結果が報告されている。続いて大阪識字・日本語協議会の動向の他、1990年から始まった「よみかき茶屋」、大阪市立南小学校における実践、「MINAMIこども教室」の報告がある。その他、尼崎市における識字・日本語教室と夜間中学校の動向が紹介されている。

第三に、全国夜間中学校研究会の動向が詳述されている。「多様な教育機会確保

法案」の成立を視野に入れたものとして、本学会の設立に向けた動きと日本語学習に関する論考がある。

最後に、イギリス、アメリカにおける近年のリテラシー研究や成人基礎教育をめぐる政策展開が紹介されている。

知識基盤社会といわれる今日、文字の読み書きは学習活動のみならず、日常生活を送る上で不可欠なものである。評者はネパールをフィールドに、女性のための識字教育や教育支援活動に関わっているが、本誌で紹介されている事例から、かつて同国の識字クラスにて、ある女性から、「(字が読めるようになったので)私は、皆の前で発言できるようになりました。もう恥ずかしくない」と言われたことを思い出した。「読み書きができない」ということで、人の後ろに隠れるように過ごしてきたというこの女性は、つらく悔しい想いを抱えて続けていたのである。社会背景は異なるが、文字を獲得することとは、単に基礎学力を習得することのみならず、人々の心に灯りをともし、社会への参加を促す第一歩となることを物語っているといえよう。

本誌が今日の日本社会における基礎教育保障の現状と課題を学ぶための貴重な一冊であるとともに、編集担当の棚田氏の手腕にも大きく拠ることを最後に記しておきたい。